

令和8年度 第1回伊予市総合計画審議会 会議録

日 時 令和8年5月26日（火）
14時00分から16時00分
場 所 伊予市庁舎3階 庁議室

◇出席者

〔委員〕

前田 眞、香西 恵子、高木 綾子、西田 洋一、清水 涼太、中尾 治司
森本 吉徳、加藤 翔大、井上 仁、出来 和人、西山 安幸

〔事務局〕

松田 智樹（企画政策課長）
向井 英樹（企画政策課課長補佐）、丸橋 裕（企画政策課係長）
木原 祐二（株式会社長大）、吉本 真名（株式会社長大）、馬越 陽一郎（株式会社長大）

◇欠席者

〔委員〕

須之内 靖

◇傍聴者

なし

1 開会

2 着任あいさつ

中尾 治司 （令和8年4月1日委嘱）
西山 安幸 （令和8年4月1日委嘱）

3 議事

- （1）ワークショップ結果について
- （2）市長インタビュー結果について
- （3）関係団体等へのヒアリング結果について
- （4）基本構想の方向性について

（事務局）

-事務局より説明-

（会長）

まず、市民アンケートに関して、御意見や御質問があれば、どなたからでも御発言願う。

(会長)

アンケート結果を見ると、現行の総合計画の中で、満足度の高い施策は「安らぎのある住環境づくり」で、次いで「潤いのある水環境づくり」となっている。伊予市は水資源に乏しい印象があるが、改善されているという結果なのかなと思う。

また、施策の重要度については「安全・安心に暮らせる災害に強いまちづくり」、次いで「次世代を担う子どもたちの育成支援」となっている。委員各位の実感として問題なければ、そのように受け止めてよいと考える。

それから、高校生年代を対象とした進路に関するアンケートでは、居住意向については、まだ分からないというところがあるが「ぜひ住みたい」、「すぐにではないが、いつかは住みたい」の合計が30%程度である。

以前、宇和島市で同様のアンケートを行ったところ、約90%が「外に出たい」という結果だったと記憶している。そこで宇和島市は大変な危機感を覚え、「ホリバタ」という青少年の交流事業を始めた。市内の高校生を集めて、自分たちがやりたいことを実現していこうと、意見交換の拠点づくりをした。その成果として、今春高校を卒業して大学に進学した子たち10人程度が「ブーメランカレッジ」という地域活性化活動を始めた。危機感から始まった活動である。そこから、高校の枠を越えた交流が生まれてきており、宇和島城が好きな生徒が集まって、城郭ガイド活動を始めたり、予土線の活性化に高校生の立場で参加したり、そこに行政から少額ではあるが支援を行っている。それから考えると、伊予市は30%と比較的高い水準にあると感じるので、この世代をどう生かしていくか、というのは重要なテーマではないだろうか。

(事務局)

本市においても若者の流出は喫緊の課題である。愛媛県全体でも、特に女性の流出が問題となっており、若い女性に着目した施策も進めている。若い世代が都市圏へ憧れるという思考を変えることは難しいため、将来的に戻ってきてもらう仕組み、特に子育て環境の整備をなど、様々な選択肢を確保することも重要ではないかと考えている。

(委員)

市民ワークショップのところで、年齢層によって、意見や考え方も変わってくると思うが、今回の参加者の構成はどうだったのか。

(事務局)

ワークショップ参加者の募集に関しては、広報、チラシ、ホームページの外、無作為抽出の市民1,000人、若年層に比重を置いて抽出し、案内状を送付している。また、別途、PTAにも案内をかけた。しかしながら、結果として、年齢層は高めとなった。

(委員)

参加した若年層とは何歳程度か

(事務局)

主に20代後半から30代前半である、双海地域では20歳前後の参加者もあった。

(委員)

Well-Beingの指標について、市民にとってはやや分かりにくい表現が多いように感じた。総合計画としては問題ないが、市民が自分ごととして理解できる言葉が必要で

はないか。

（事務局）

その視点は、大変重要であると認識している。誤解なく伝わる表現に努めたい。

（委員）

職員ワークショップについて、職員は市民でもある。このことから市民の視点と行政視点の両面で意見交換ができていないのではないかと考えるが、Well-Beingの24因子の中で「公共空間」や「地域とのつながり」を選定したのは、強みと考えて選んだのか、課題と考えて選んだのか、その評価はどうだったのか教えてほしい。

（事務局）

職員ワークショップは、若手職員を中心に実施し、御指摘のとおり、行政の視点、市民の視点、双方から市民が幸福を感じる要素はどうだろうか、施策として進めるべき要素はどうだろうかという視点で選定したと考えている。昨今、地域の繋がりが希薄になってきたという課題認識もありながら、まだ本市の強みであると認識しており、ここに手当をしていくという観点である。また、公共空間に関しては、自然豊かな環境の中、「しおさい公園」や「IY0 夢みらい館」など、ちょうどよい規模感の公共施設があり、それが人を呼ぶ力を持っているという強みであり、伸ばしていける分野との認識であったと考える。

（会長）

市民意識としては「地域とのつながり」、「住環境」、「子育て」、「雇用・所得」といったところが重要視されている。

また、市長インタビューの結果を見ると、繋がりを強化していきたいということや災害時の対応に強い思いを感じる。総合計画の方向性としては、チャレンジ、前に向いて進んでいくような意識を持たれているのかなと感じる。

（委員）

市長インタビューにおいて、「外部とのつながりを強化していきたい」とあるが、ここでの「外部」とはどの範囲を指すのか。

（事務局）

国・地域に限らず、人や団体も含む広い概念であると考えている。関係人口、首都圏との交流、また海外交流など多方面とのつながりである。特に最近では、伊予市・伊予郡の連携を深めており、隣接自治体とのつながりも重要視している。

（委員）

関係団体等へのヒアリング結果について、伊予市の生活は、地場産業や食など、様々なところで一次産業と直結していると感じている。ヒアリングに漁協など農業以外の団体も入っていればよかったと思う。

また、よく、若者や女性の流出、子育てというところがクローズアップされがちだが、それが強くなりすぎると、その世代が頑張らなくてはいけないのかという、違うメッセージに取られることもある。支える側ということになるのか、私たち現役世代が地域で活躍し、輝いて、幸せに暮らしている姿を見せることで、次世代のみなさんも伊予市の未来が描きやすいのではないかなと思う。現役世代に光を当てることが大切ではないかなと思う。

（事務局）

具体的にどのようにして計画に反映させていくかは、現時点で明確には答えられないが、非常に重要な視点であると考えている。現役世代の背中を見て、未来に希望が持てるというのはまちづくりとしては大事であると考えている。

（会長）

現状認識から将来像の議論へ移行していることから、基本構想の方向性について、改めて事務局から説明を受け、その上で意見をいただくこととしたい。

（事務局）

-事務局より説明-

（委員）

資料と説明を聞き、感じたことであるが、これらの資料を示し、最終的に総合計画へと落とし込んでいく流れになると思うが、その際、この資料等が市民にとって、腑に落ちるものでないといけないと考えている。ところが、提示された資料は、どこかぼやけた印象を受け、納得感を得られるものではないように感じる。極端に言えば、他の類似自治体にそのまま持っていき、名称だけ変えれば通用してしまうのではないかと思えるほど、抽象的な印象だ。もう少し、伊予市の課題や魅力、強みといったところを、市民が「なるほど」と理解できるようなものにしていかなければ、真に市民の将来像にならないのではないかと思う。より市民に分かりやすい、伊予市らしいものにする必要があるのではないか。

（事務局）

御指摘は、正にそのとおりである。伊予市の計画である以上、市民の皆様にとって分かりやすく、納得感のあるものに作り上げる必要があると考えている。

非常に重要な視点であると真摯に受け止め、今後の対応に反映させていきたい。

（委員）

先程の意見と重複するかもしれないが、今回の計画では Well-Being 指標を活用したアンケートやワークショップを実施している。これまでは SDGs という視点があったが、全国的に Well-Being 指標の活用という視点へ移行中ということもあり、十分に浸透してなく、聞きなれないような感覚になる。ワークショップなどでは説明もされていると思うが、資料として提示されると、まだまだ分かりにくさが残っており、違和感の原因になっているのではないか。

今回の議論は、各種調査結果や市長の考え方を踏まえ、計画の方向性として、将来像をどう描くかという段階であると理解している。

今回示された将来像の案について、「人生が続き」という表現があるが、少し違和感がある。人生が続くことが当たり前とは限らず、受け止め方に幅がある言葉に感じる。例えば、「ここに住み続けるために」といった表現のほうが適切ではないかと考える。

（事務局）

今回、提示した将来像に至った背景には「つながり」というキーワードが関係している。Well-Being の分析、市長の考え、いずれにも「つながり」が重要視されている。

この「つながり」を軸に、暮らし、仕事、人との関係性を整理したものが、基本構想の中心的な考え方である。

なお、文言については、この場で決定するものではなく、各位の意見を踏まえながらまとめていく予定である。

(委員)

案の全体を見ると「住んでよし、働いてよし、繋がってよし」といったところだ。

観光振興協会のD-NEXT調査においても、伊予市では「飲食」「買い物」「娯楽」といった分野の重要度が高い一方で、実現度が低いというギャップが大きく表れている。つまり、期待は高いが供給が不足している状況であり、そこを埋めることが持続可能性の向上に繋がるのではないか。

伊予市は立地的にも有利で、松山市や空港に近く、自然環境も整っている。実際に住んでみると、非常に住みやすいまちだと感じる。しかし遊び場や娯楽の不足を感じる場面がある。このような具体的課題も計画に反映されることが大切で、抽象的な表現だけでは議論しづらいと感じた。

(会長)

正にそのとおりである。言葉と実態の繋がりをどう示すかが重要である。

(委員)

総合計画である以上、どうしても総合的、抽象的になるのは避けられないところもあるが、そのバランスは難しいと感じる。

雇用や所得という部分は非常に重要であり、働く選択肢を広げるという方針は強化すべきだと考える。

ただし、直接的な雇用創出は自治体では難しい部分も多く、むしろ既存の仕事や働き方を可視化し、若者が将来をイメージできる環境づくりが重要ではないかと考える。

(会長)

働き方や生き方を含めた広い視点が重要である。官民連携で実現する姿が示されるとよい。

(委員)

方向性としては、伊予市の良さを前向きに打ち出そうというところである。市民の皆さんや外部の方からみても、良いキャッチコピーでやっているなというような、皆さんの心の中にストンと落ちるようなところに近づけていきたい。そのような部分が本会の目的であると考えている。その上で、原点に帰ると、自己肯定感の高いまちという視点が重要ではないか。住む人自身が「このまちはいい」と自信を持てるような表現が望ましい。ネガティブではなくポジティブで、耳に残る言葉である。先程意見のあった「住んでよし、働いてよし、つながってよし」という言葉は印象的であった。

(委員)

「伊予市らしさ」を言語化することは難しいが、住民が感じている満足度の要因を掘り下げることが重要であると考えている。

(委員)

伊予市に住む人にとっては当たり前のことだが、実は外部から見ると大きな魅力である「夕日」、「地元食材」、「生活環境」など、日常の豊かさを言語化することが重要であり、そこにヒントがあると思う。

(委員)

子育てに関し、アンケートでは重要度が高いにも関わらず、資料を取りまとめている中で、しだいに薄れていくような印象を受ける。将来像に直接反映させるのは難しいにしても「子どもを大切にしている」という姿勢が見える表現が必要ではないか。

また、市長の言葉として「誰一人取り残さない」という考えを実現するために、教育支援を含め、弱い立場の人たちへの配慮が不可欠であり、しっかりと取組に反映させるべきであると考ええる。

（副会長）

人口減少社会における社会増減の観点から、ライフイベントの様々なタイミングがあり、そこで、誰に選んでいただけるのか、ターゲット層を明確にする必要があるのではないかと。また、子どもたちの教育、郷土愛の形成に加え、時流を捉え、AI 技術など、時代の変化も踏まえた計画が望ましい。

（事務局）

多くの貴重な御意見に感謝する。市長も常々「誰一人取り残さない」という言葉を使っており、市民みなさんが幸せになる取組を目指していきたい。本日の御意見それらすべてを将来像で表現することは難しいかもしれないが、個別の計画、又は総合計画の分野別施策の中で表していきたいと考えている。また、AI の話もあったが、本当に目まぐるしく社会情勢が変化しており、行政も対応が困難な状況にあるが、御意見にあったとおり時流にあった計画づくりを進めていきたい。

（会長）

これからの時代、多様性の視点も重要である。寛容さという言葉が適切かどうかは分からないが、多様性を認めていくことが大事だ。例えば国籍である。生活様式、文化の違いによる問題に対する対応、次に働き方、今はダブルワークやリモートワークといった様々な働き方がある。暮らし方も多様だ。一か所にとどまらず、二地域居住、週末居住などがある。そのほかにも性別などもあるが、これまでの当たり前にとらわれず、多様なあり方を受け入れることができる社会の実現が問われていると考える。そのことが、伊予市を目指して来ていただくことにつながるかもしれない。10 年後の将来を見据えた柔軟な発想が求められている。

ことが大事である。まずは国籍、伊予市も外国の方が多く住んでいらっしゃる。そこで問題になるのは、ごみの出し方や生活様式である。そういった文化の違いを感じたときに、こういった解決手法があるだろうか。次に、働き方、ダブルワークやリモートワークといった様々な働き方がある。暮らし方もある。一か所にずっと住んでいるというのがこれまで当たり前だったのが、今は二地域居住や週末居住、移住など様々な暮らし方がある。その外にも性別や障害など様々なものがある。それら多様なあり方を受け入れられる社会を実現するかが問われており、それが伊予市を目指してきていただくことにつながるかもしれない。10 年後の将来を見据えた柔軟な発想が求められている。

今回、様々な御意見をいただき、事務局にも多くの宿題ができたかもしれないが、それらを踏まえ、うまくまとめていただきたいと思います。

(5) その他

(事務局)

-事務局より説明-

- ・スケジュールの確認

4 閉会